

2024年5月5日

主題「深くあわれんでくださる主」

ルカの福音書 7:11-17

序

連休の真っ只中にありますけれども、それぞれが抱えているものを下ろして、今日も神の前に静まっていきたいと願います。先週は、百人隊長の信仰から、信頼すべきは、みことばであり、みことばは、私たちと神との隔たりの架け橋となることを改めて覚えました。そして本日の箇所は、一人息子を亡くした一人のやもめとイエスの出会いです。今日もともにみことばに聞いていきましょう。それでは11節をご覧ください。

1. やもめの悲嘆

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。

百人隊長のしもべを癒やされた「それから間もなく」、イエスはナインという町に弟子たちや大勢の群衆たちを連れて行かれた。あまり聞き馴染みのない町の名前であるかと思えます。それもそのはずで、このナインという町が聖書の中で出てくるのは、実はこの箇所だけなんです。そしてこのナインという町は、百人隊長たちがいたカペナウムから、直線距離で大体40kmくらいです。サラッと書かれているので、隣町にでも行ったのかな？と思ってしまいましたが、40kmもあるわけです。40kmってけっこうな距離です。軽井沢からだとどのくらいかな、と調べてみたらですね、大体、この軽井沢キリスト教会から前橋駅まで直線距離で41kmです。そして、ここから徒歩で11時間と出てきました。しかもイエスたちが歩いて行った道というのは、今のきれいな整えられた道とは違い、ガタガタで舗装もされていない道です。もちろん、途中で休んだりもしたと思いますが、そんな道を40km以上歩くというのは、大変なことであったと思わされます。ここまで大変な思いをしてもなお、イエスはナインの町に行かれた。それは一体なぜだろうか。その疑問を持ちつつ本日の箇所を読み進めていきたいと思います。それでは、12節をご覧ください。

イエスが町の門に近づかれると、見よ、ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出されるところであった。その母親はやもめで、その町の人々が大勢、彼女に付き添っていた。

イエスは町に着いて、町の門に近づくと、「ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出されるどころ」に遭遇するわけです。そしてルカは、この「ある母親」を「その母親はやもめで」と夫に先立たされた女性、「やもめ」であると説明するわけです。この女性は夫に先立たれ、それだけでなく、今愛する一人息子が亡くなった。そのような葬儀の真っ只中にイエスは来られたわけです。

このやもめの悲しみというのは、言葉にすることなどできないものです。悲しみのあまり自分で立つことすらままならない。そんな彼女のために「その町の人々が大勢、彼女につき添って」くれていた。愛する一人息子を失うという、想像を絶する悲しみに打ちのめされているとき、町の人たちは一緒にいてくれた。これは、本当に大きな支えであったと思います。しかし、この町の人たちの支えは彼女の悲しみの解決にはならなかった。愛する一人息子を失い、涙があふれてとまらなかった。人生の最も深い悲しみの中に置かれていたそんな只中で、彼女はイエスと出会ったんです。13節。

2. イエスのあわれみ

主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。

「主はその母親を見て深くあわれ」んだ。彼女からは、一言の嘆きも、願いも、信仰の言葉もない。周りをみる余裕なんか微塵もなかった、町の人たちに支えられて、ただその場にいるのが精一杯の母親。イエスはそんな彼女を「見て」くださった。あまりにも深い悲しみの中にある彼女をご覧になって、そして「深くあわれんで」くださった。この「深くあわれみ」ということば。聖書に何度か出てくるんですけれども、これは「内臓がかき回されるような痛みと悲しみ」といった意味を持っています。もう少し馴染み深い言葉で言うならば、「内臓を引きちぎられるような痛みと悲しみ」。これをイエスは彼女を見て味わわれた。同情のレベルのものじゃない。そんな生易しいことばとは次元の違う感情。腹の中がかき乱され、引きちぎられるような痛みがもたらされるほどの悲しみの感情。イエスはどのようにしてこれほどまで、激しい感情を持たれたのか。

それは、彼女のすべてを知っておられるイエスだからこそ。夫を亡くし、唯一の希望とも言えるこの一人息子が亡くなる。これが彼女にとってどれだけのことなのか、文字通り痛いほど分かっていた。しかし、それだけじゃない。イエスが「深くあわれんだ」理由。それは、「死」が人にもたらす、悲しみ、絶望がどれほどのものなのかをご覧になったから。罪による報酬である「死」が、愛し合う人々を引き離し、また神と人とを引き離し、滅びへと向かわせる。

自分の力ではどうしても逃れることの出来ない罪人の向かう先を見られて、イエスは「深くあわれんで」くださったんです。そして、この断絶から人々を救うために来てくださったご自分の使命をもう一度確信し、「深くあわれんで」くださった。そしてイエスは言うんです。

泣かなくてもよい

このことばを聞いて母親は何を思ったのでしょうか。悲しみの中にある中で、聞こえてきたこのことば。続けて、14 節前半をご覧ください。

そして近寄って棺に触れると、担いでいた人たちは立ち止まった。

イエスは、「近寄って棺に触れ」られた。死人に触れる者は汚れる。律法に定められていたことでもあり、当時の常識でもありました。そして、棺に触れるということは、死人に触れることと同じでした。しかしイエスは、迷いもなく、ためらいもなく、汚れた棺に手を伸ばして触れてくださった。すると異変を感じたのか、棺を担いでいた人たちは立ち止まった。そして、イエスは亡くなっている一人息子にこう言われた。14 節後半から 15 節。

イエスは言われた。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。

イエスの力あることば「若者よ、あなたに言う。起きなさい」、このことばよって、「その死人が起き上がった」。イエスがことばを發し、死人が生き返るといふ奇蹟が起こった。そして生き返ったことの明らかな証拠として、死人が「ものを言い始めた」。これを見た人々の反応が 16-17 節にあります。16-17 節。

人々はみな恐れを抱き、「偉大な預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がご自分の民を顧みてくださった」と言って、神をあがめた。イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まった。

人々は神の力を見たんです。これまで見てきた箇所でもそうですが、神の力を見るとき、人は恐れを抱く。自分の理解をはるかに超えた力が働いているのを人々は見るからです。そして、人々は、自分たちにとって考え得る最大の称号である「偉大な預言者」とイエスを表現し、神がご自分の民を見捨てず、顧みておられることを語り、神をあがめた。

その結果、「イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まった」。それだけ、この出来事は衝撃的なものだった。神の力によって、一人の人が生き返った。この嘘偽りのない事実によって、神が証された。

結論 あわれみの主

そしてこの驚くべき、一人の若者が生き返るというイエスが起こされた奇蹟の話は閉じられていきます。ルカはこの後、この親子がどのように生きていったのか、については何も触れず、その応答として描いたのは、人々が恐れを抱いて、神をあがめた、ということ。普通に考えれば、この後の親子の応答を知りたいと思う。しかし、ルカはそこには注目しなかった。そうではなくルカが描いたのは、「私たちの主」の「内臓が引きちぎられるような痛み」のともなう「深いあわれみ」によって、一人の母親の人生で最も悲しい日が、人生最高の喜びの日が変わった、ということ。

イエスはカペナウムからナインに来られた。40km以上の道のりを、時間をかけてナインに来てくださった。その理由は、このやめめを深くあわれんでくださるため。

そして今日私たちが覚えていたいことは、イエスがこのやめめに注いでくださった、「深いあわれみ」の視線は、今この時、私たちにも注がれている、ということです。なぜなら、私たちもこのやめめと同じだからです。「死」がもたらす悲しみ、怒り、絶望、喪失感、虚無感、この感情は、私たちのいつも隣にあるからです。もしかしたら、今その只中に居られる方もいるかもしれません。愛する人を失う恐れ。そして、自分自身のいのちも自分では決してコントロール出来ない現実。「死」がもたらす圧倒的な力の前に、無力に立ち尽くす私たちがここにいる。そんな私をイエスは内臓が引きちぎられるような痛みと悲しみを持って「深くあわれんで」くださっている。そして、それは心の中であわれむだけではないんです。現実にそれを私たちに見えるかたちであらわし、為してくださった。それがイエス・キリストの十字架です。この十字架という「深いあわれみ」によって、イエスは十字架の上で私たちの身代わりに「死」を引き受けてくださった。そして、これは神のひとり息子を与えてくださった父なる神の「深いあわれみ」であり、そのことが分かるように導いてくださる聖霊による「深いあわれみ」でもあるんです。

一人息子を亡くし、絶望の只中にあった母親が、イエスによって息子がよみがえり、与えられた喜び。この喜びは、今度は神のひとり息子であるイエスの死と復活によって、このことを信じるすべての人々の喜びとなったんです。

このイエス・キリストの十字架による罪の赦しと復活を信じる者に約束されたことばがここにある。ヨハネの黙示録 21:3-4 節。

「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

私たちの人生はこの肉体の死によって終わりません。イエス・キリストの十字架による罪の赦しと復活を信じる者は、その先にある、決して滅びることのない永遠のいのちが約束されている。三位一体の神の「深いあわれみ」によって与えられたこの十字架と復活による救いを私たちは、受け取り続けていきたい。そしてこのイエスの深いあわれみは、私だけに注がれているのでない。私の隣人にも注がれていることを覚えて、「深いあわれみ」の目を持ち、関わりが与えられている人たちに仕えていくことができますように、そのような教会として歩ませていただきたいと心から願います。